

金島書 北山

只こと へかくて、古き人に逢いて、当国の神秘、結界、尋ねおくりなり。

上へ抑、我が朝、秋津洲と申は、粟散辺土の小国なりと申せども、天地開闢の国にして、天照大神の御末、正しく日統を戴く事、今に絶えせず。

さし事 へ然れば、国の名を問へば、神道に於いて、様々也。先づ、大日本国にとは、青海原の海底に、大日の

金文現れ給しより、後代に、名付けし国とかや。

しばらく、これを惟れば、其の品々も一ならぬ、

八島の浪の寄りよりに、粗々語り申べし。

曲舞

其の初めを惟れば、天祖の御譲り、天の浮き橋よ

り、光り差し下ろす、矛まの国の、淡路を初めと

して、彼は南海、此は北海の佐渡の島、胎金両

部を具へて、南北に浮かむ。海上の四涯を護る、

七葉の金の蓮の上よりも、浮かみ出で立つ国とし

て、神の父母とも、此の両島を云とかや。されば、

北野の御製にも、彼の海に、金の島の、有るなる

を、その名と問へば、佐渡と云也。この御神詠も、

あらたにて、妙なる国の名も久し。

然れば、伊奘諾、伊奘冊の、その神の代の、今殊

に、御影を分て、伊奘諾は、熊野の権現と現れ、

なんざん 南山の雲に種蒔きて、国家を治め給へば、伊奘冊
は、白山権現と示現し、北海に種を収めつゝ、菩
だいねはん 提涅槃の月影、此の佐渡の国や、北山、毎月毎日
やうがう の影向も、今に絶えせねば、国土豊かに、民厚き、
雪？ 雲の白山も、伊奘冊も、治まる佐渡の海とかや。
下へ 抑、斯かる靈国、仮初ながら、身を置くも、
いっ 何時の他生の縁ならん。うしや、代雲水の住むに

まか 任せて、その儘に、衆生諸仏も、相犯さず、山
をのづか 是自ら高く、海は自ら深し。かゝり尽くす、山
うんかいげつ 雲海月の心、あら面白や、佐渡の海、満目青山、
なををのづか 猶自ら、その名を問へば、佐渡といふ、金の島ぞ、
たへ 妙なる。

かくの如くして、此土地の古老に会つて、当国佐渡の神秘結界

を尋ねて記して置くのである。

一体、我が朝秋津洲と申す国は、粟散辺土の小国だとは申すけれども、天地開闢の国であつて、天照大神の御神裔が、正しく日統を御継ぎ遊ばされる事は、今も絶える事のない国である。それで、この国の名称を尋ねて見ると、神道に於て様々の名が呼ばれてゐる。先づ、大日本国といふは、青海原の海底に、大日といふ黄金の文字が現はれ給うたことから、後代になつて、かやうな国名を附けたとかいふことである。暫くこれを考へて見るに、そのしなじなも数多いことであるから、あれこれに関

して、大略のところを語ることにしよう。

この国の初を考へて見ると、天祖の御譲りであつて、天の浮橋の上から、差し下し給ふ瓊矛の滴りに成つた淡路の国をはじめとして、それは南海に、この佐渡の島は北海にあつて、胎蔵・金剛の両部を具へて、南北の海上に浮んでゐるのである。そして海上の四方の涯までを守り、七葉の黄金の蓮の上から浮み出てる国として、此の両島を、神の父母とも呼ぶとかいふ事である。それで北野天満宮の御歌にも、「かの海に黄金こがねの島のあるなるを、その名ととへば佐渡といふなり」とよまれて居り、こ

の御神詠もあらたかで、其の妙なる国の名は久しく知られてゐる所である。さて、その神代の伊奘諾・伊奘冊の二柱の神は、今は別々に御垂跡遊ばされて、伊奘諾は熊野の権現とあらはれ、南山の雲に種を蒔いて国家を治められ、伊奘冊は白山権現とあらはれ給うて、北海に種を収められながら、菩提涅槃の月影として、此の佐渡の国即ち北山に、毎月毎日御影向になり、今に絶える事がないので、国土は豊かで民も敦厚であり、雪の白山も伊奘冊も、共にこの佐渡の海におさまり給ふとかいふことである。一体かやうなあらたかな国に、仮初ながら我が身を置

く事も、どうした他生の縁によつたものであらうか。ああ善き哉、自分如き雲水の身も、住むにまかせて住ましめておき、そのまま衆生諸仏も相犯すこともなく、山は自づからにして高く、海は自づからにして深くたたへてゐる。「語り尽す山雲海月の心」といふ言葉の如く、まことに面白いのは佐渡の海で、満目青山また自づからなるよそほひを示す。その名を問へば佐渡といふ、この黄金の島は妙なる所である。